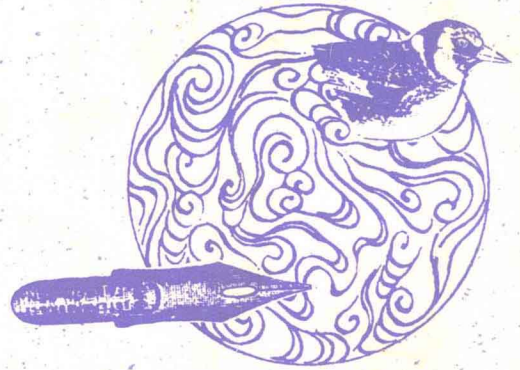


日本語表現文型

用例中心・複合辞の意味と用法

森田良行 松木正恵



日本語表現文型

用例中心・複合辞の意味と用法

森田良行 松木正恵

森田良行（もりた よしゆき）

早稲田大学教授 早稲田大学日本語研究教育センター所長

略歴 1930年1月、東京に生まれる。早稲田大学第一文学部卒業。
同大学大学院修士課程修了。1964年より早稲田大学において日本語
教育ならびに日本語学を担当。1978年、インドネシア国立バジャ
ジャラン大学、1982年、北京大学の客員教授。

著書 『基礎日本語』全3巻（角川書店）、『日本語の類意表現』（創
拓社）、『誤用文の分析と研究』（明治書院）、『日本語をみがく 小 辞
典』〈名詞篇〉〈動詞篇〉（講談社現代新書）など多数。

松木正恵（まつき まさえ）

早稲田大学日本語研究教育センター助手

略歴 1959年生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。都立高校教諭を
経て、1987年、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。ひき続
き青森明の星短期大学専任講師。論文に「現代日本語助詞の使い分
け能力——帰国子女と一般中・高校生の比較を中心に——」「いく
つかの類義表現の異同に関する考察」などがある。

NAFL選書5

日本語表現文型

1989年5月1日発行 1989年12月20日第2刷発行 定価 3,300円（本体 3,204円）

著 者 森田良行 松木正恵

発行者 平本照磨

発行所 株式会社アルク

〒168 東京都杉並区永福2-54-12

電話 03-323-1001（書店営業部）

03-323-5514（日本語出版編集部）

振替 東京 9-131316

印刷所 凸版印刷株式会社

©1989 Yoshiyuki Morita, Masae Matsuki

Printed in Japan ISBN4-900105-65-1 C1381

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

まえがき

日本語教育者はもちろん、日本語学習者にとって、日本語を知ることがいかに大切なことかは自明のことである。だが、一歩進めて、日本語を知るとはいったい何かと問われると、正しく答えられる人は意外と少ない。日本人ならだれでも日本語がわかるといった神話は崩れて久しい。日本人でも日本語を知らない人が多く、ましてや日本語の教えられる人は極めて少ないと考えるのが今日、常識となっている。

それではどうすれば日本語の達人になれるか。日本語に関する書物をひもといて学習すればよいとの答が返ってくる。確かにその通りであるが、文法・語彙・意味・音声・表記……と言語学習の各分野を見渡しても、参考書が完備しているという状態にはほど遠い。文法や意味の問題に関して見ても、語用論や文法論・語義論といった面では優れた文献を見出すことはたやすいが、語や文の範囲から一步はずれた対象、たとえば連語や連文を問題の正面にすえて論じた研究書となると、はなはだ心もとない。しかも、それこそ言語を表現のレベルで考えるとき避けて通れぬ重要なポイントとなる対象なのだ。

表現文型を形づくる部分、特に主題を示す箇所や文末、あるいは複文を構成する接続部分など、これらは、形式化した語や助詞・助動詞などが複合しあい、全体が一つの付属語のように機能して、独自の表現形式を生み出すことが多い。いわゆる複合辞（もしくは複合助辞）と呼ばれる部分である。これは日本語を表現レベルでとらえようとするときの極めて重要な文法問題といってよからう。ただ、語の枠を超える対象であり、解釈がむずかしいところから、従来ほとんど手の着けられていない部分であった。それだけに、日本語を文型中心に取り扱う日本語教育においては、この複合辞に関する研究書の出現が待たれてい

たのである。

本書の著者の一人、松木正恵さんは、早稲田大学大学院に在学中は現代日本語を専攻し、修士論文として複合辞に関する研究をまとめた篤学の徒である。本書は、その折、集められた膨大な用例資料に分類整理を施し、各表現形式ごとに解説を加えて成ったものである。書名に「表現文型」と謳ったが、「複合辞の用例と使い方」と読み換えてもよい。複合辞の分類ならびに解説は松木が担当し、森田は原稿に目を通して全体のバランスを整え、選ばれた例文の取捨と解説文の字句の修正を行うにとどまった。本書が、日本語研究・日本語教育の現場で広く活用されることを期待したい。

一九八九年三月

森田 良行

凡例

一 本書の方針と特色

1 本書は、いわゆる「複合辞」の意味と用法の解説を通して、日本語の表現文型的一端を明らかにしようとして試みたものである。用例は、日本語教育に携わる者および日本語学習者の利用の便を図り、中級日本語教科書・小説・論説等からの実例を数多く採録するよう努めた。特に小説に関しては、言文一致以降の明治二十年代から昭和五十年代までの広い範囲にわたって用例を収集し、時代的な片寄りが出ないよう配慮した。日本語教育の立場からすると多少古めかしい表現も無いではないが、時代的な動きを知るうえで意味あることと考え、あえて採録することにした。

2 「複合辞」とは、いくつかの語が複合してひとまとまりの形で辞的な機能（助詞・助動詞相当の機能）を果たす表現である。例えば、「どうせやるからには最後までがんばれ。」の「からには」は、一般には「から（接続助詞）」＋「に（格助詞）」＋「は（係助詞）」と分析されるが、このように分けてしまうと、常にひと続きで用いられる「からには」固有の意味・機能を十分に説明することができない。そこで、ひとまとまりの形で単なる語の接続という形式以上の意味・機能を果たしている表現を「複合辞」と呼び、それを一単位体として分析する立場が必要となってくる。これは、特に日本語教育には有効な考え方である。本書では、従来の日本文法における助詞・助動詞分類にならない、これらの複合辞の意味・機能の上から、「助詞の働きをするもの」と「助動詞の働きをするもの」とに、それぞれ分類して示した。

3 どのような表現を複合辞と呼ぶのかという基準について定説はないが、本書では、単なる語の接続ではなく、表現形式全体として、個々の構成要素のプラス以上の独自の意味が生じていることを一つの目安とした。従って、単なる接続に過ぎない「てから」「までに」「うちで」「間に」「時に」等は本書では扱っていない。ただし、日本語の表現文型を考える上で重要と思われる表現については、「わけた」「はずだ」「つもりだ」等のように単なる接続と思われるものでも取り上げている場合がある。（「わけさ」「はずね」「つもりよ」等は省略した。）なお、形式名詞単独で辞的な機能を果たすものももちろん複合辞ではないが、意味・機能上複合辞と同等とみなされる場合も多い。本書では、「うえ（で）」「すえ（に）」「ところ（が）」等、単独でも複合した形でも辞的機能を有する表現については、一部取り上げて

いる。

4 「複合辞性」とは、複合辞らしきことであり、様々な尺度が考えられるが、本書では、①構成要素の緊密化の度合、②語の形式化の度合、の二点を目安にした。①は、一表現を形成する個々の構成要素が緊密に結びついているものほど複合辞性が高いという見方である。具体的には「ことができる」→「ことはできる」「こともできる」「ことのできる」のような交替や、「ことがある」→「ことがしばしばある」等他語の挿入、また、「見たこともないし、聞いたこともない」→「見たことも聞いたこともない」といった部分省略の行われにくい表現ほど複合辞性が高いことになる。②は、複合辞の構成要素である名詞・動詞・形容詞などの語が、本来の機能を失って形式化し、助詞・助動詞的な機能しか果たさなくなっているものほど複合辞性が高いという見方である。この点は判断が難しく、個々の表現によって異なるため統一的な基準は示せないが、動詞に関しては、本来の活用機能を失っているものほど複合辞性が高いという原則がある。例えば、動詞「よる」「とる」を中心とした複合辞を比較してみると、「よる」のほうはその活用形に応じて、「によって」「により」「によると」「によれば」「によらず」、連体格「による」「によっての」など種々の表現形式があるが、「とる」を中心とした複合辞は「にとつて」の形しか存在せず、連体格も「にとる」はなく「にとつての」のみである。これは、「よる」が未だ活用機能を失っていないことを意味し、その点で「とる」のほうが複合辞性が高いと判断できるわけである。

5 日本語の表現文型と一口に言っても概念が広く、様々な取り上げ方が可能だが、本書では、複合辞との関連性から表現文型をとらえている。これは、助詞・助動詞類が文の表現パターンを性格づける重要な決め手となることから、助詞・助動詞相当の機能を果たす複合辞も、表現パターンにとって重要な手がかりを与えると考えられるとの判断によるものである。

6 本書では実際の用例をもとに複合辞を収集したため、本書の見出し語が複合辞のすべてを網羅しているというわけではない。また、3で述べたように、複合辞とは認めにくい表現でも取り上げられている場合がある。

7 各表現の意味・用法の解説については、類義表現との異同が明らかになるよう配慮した。その際に取り上げた類義表現は、複合辞だけに限定せず、助詞・助動詞・形式名詞・連語表現など、広い範囲から求めた。なお、これらの類義表現はもちろん、見出し語の言い換え表現をも含めた、本書中の全表現形

式は、巻末の「表現索引」で検索できるようにしてある。

二 本書で使った記号

1 () ……見出し語等の表現に付した() は、() 内の要素を付加しなくても可能なことを示す。

例…「につけ(て)」→「につけ」「につけて」の両方が可能

「にかけて(は・も)」→「にかけて」「にかけては」「にかけても」の三通りが可能

へ・へ ……解説中の表現に付したへ・へ は、へ・へ 内の要素がその直前の語句と交換可能なことを示す。

例…「にへへ対し」→「に対し」「へ対し」の両方が可能

「においてへにあつて」→「において」の代わりに「にあつて」を用いることも可能

2 ○ ……中級日本語教科書・小説・論説等から採録した用例を示す。各出典は用例末尾に(浮)等の略号で明示した。(略号と出典については次項参照。)なお、略号の付記されていない用例は作例である。

a・b・c等……類義表現等を比較対照して解説する便宜上の作例を示す。一つの項目に一例しか示す必要がない場合には、・で代用した。

3 × ……a・b・c等の作例の右肩に付した×は不成立の文(非文)を示す。

△ ……文としては成立するが、そこで求められているものとは別の意味にしか解釈できない文を示す。

? ……やや不自然な文だが、人によって判断に差が出ると思われることを示す。

↓ ……参照すべき表現項目のページを示す。

三 用例出典一覧

() は本文中に使用した略号を示す

[中級日本語教科書]

(MⅡ) 国際基督教大学日本語科編『Modern Japanese for University Students Part II』(別冊『Exercises』『Supplementary Material』) 全四冊。一九六六年九月初版、一九六九年四月改訂版)

(早Ⅰ) 早稲田大学語学教育研究所編『外国学生用 日本語教科書 中級』第一部(一九七二年五月)

(早2) 同前 第二部

(日Ⅱ) 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校編『日本語Ⅱ』(一九七三年八月)

(Ⅰ) 大阪外国語大学留学生別科日本語研究室編『INTERMEDIATE JAPANESE——中級日本語』

VOLUME 1 (一九六八年七月初版、一九七四年十月改訂版)

(Ⅱ) 同前 VOLUME 2 (一九六八年八月初版、一九七八年六月改訂版)

(中) 東海大学留学生別科編『日本語 中級Ⅰ』(一九七九年十月)

(Ⅰ) JAPANESE LANGUAGE PROMOTION CENTER 編『INTENSIVE COURSE IN JAPANESE: INTERMEDIATE』("MAIN TEXT") 〇他 別冊 "NOTE" を含む。一九八〇年七月)

(型Ⅰ) 筑波大学日本語教育研究会編『日本語表現文型 中級Ⅰ』(一九八三年四月)

(型Ⅱ) 同前『日本語表現文型 中級Ⅱ』(一九八三年四月)

『小説・随筆・論説』

『浮』二葉亭四迷『浮雲』(明治二十年六月、角川文庫 昭和五十三年七月)

(多) 尾崎紅葉『多情多恨』前編(明治二十九年二、六月、『日本現代文学全集5 尾崎紅葉集』講談社

昭和三十八年三月) この場合のみ、全集の本文が旧字体・旧仮名づかいのため、現代表記に改めてか

ら引用した。

(武) 国木田独歩『武蔵野』(明治三十一年一月)

(牛) 同『牛肉と馬鈴薯』(明治三十四年十一月)

(少) 同『少年の悲哀』(明治三十五年八月)

(春) 同『春の鳥』(明治三十七年三月)

(右四編、旺文社文庫 昭和四十五年六月)

(野) 伊藤左千夫『野菊の墓』(明治三十九年一月、角川文庫 昭和五十九年八月)

(坊) 夏目漱石『坊っちゃん』(明治三十九年四月、旺文社文庫 昭和四十年七月)

(ふ) 永井荷風『ふらんす物語』(明治四十一年、新潮文庫 昭和四十三年十一月)

(刺) 谷崎潤一郎『刺青』(明治四十二年十一月、新潮文庫 昭和六十一年五月)

(門) 夏目漱石『門』(明治四十三年三、六月、岩波文庫 昭和三十七年二月)

(年) 谷崎潤一郎『少年』(明治四十四年六月)

(幫) 同「幫間」(明治四十四年九月)

(右二編、新潮文庫 昭和六十年五月)

(阿) 森鷗外「阿部一族」(大正二年一月、岩波文庫 昭和四十一年九月)

(硝) 夏目漱石「硝子戸の中」(大正四年一月、岩波文庫 昭和五十九年十一月)

(腕) 永井荷風「腕くらべ」(大正五年八月、岩波文庫 昭和六十二年二月)

(戲) 芥川龍之介「戲作三昧」(大正六年十一月、旺文社文庫 昭和四十一年十二月)

(生) 有島武郎「生れ出づる悩み」(大正七年三月、旺文社文庫 昭和四十六年七月)

(都) 佐藤春夫「都会の憂鬱」(大正十一年一月、旺文社文庫 昭和四十六年八月)

(伸) 宮本百合子「伸子」(大正十三年九月、新潮文庫 昭和六十年六月)

(様) 小林秀雄「様々なる意匠」(昭和四年九月)

(現) 同「現代文学の不安」(昭和七年六月)

(X) 同「Xへの手紙」(昭和七年九月)

(右三編、角川文庫 昭和五十四年五月)

(美) 堀辰雄「美しい村」(昭和八年十月、新潮文庫 昭和六十年五月)

(遷) 永井荷風「遷東綺譚」(昭和十二年四月、岩波文庫 昭和六十年五月)

(愛) 武者小路実篤「愛と死」(昭和十四年七月、新潮文庫 昭和六十一年三月)

(夏) 原民喜「夏の花」(昭和二十二年六月、新潮文庫 昭和四十八年四月)

(夫) 大岡昇平「武蔵野夫人」(昭和二十五年一月、新潮文庫 昭和五十九年十一月)

(み) 幸田文「みそつかす」(昭和二十六年四月、岩波文庫 昭和五十九年五月)

(夜) 北杜夫「夜と霧の隅で」(昭和三十五年五月、新潮文庫 昭和五十二年七月)

(砂) 安部公房「砂の女」(昭和三十七年六月、新潮文庫 昭和六十年二月)

(立) 柴田翔「立ち盡す明日」(昭和四十五年十一月、新潮文庫 昭和六十年一月)

(魔) 山本道子「魔法」(昭和四十七年三月)

同「老人の鴨」(昭和四十七年八月)

(右二編、新潮文庫 昭和六十二年一月)

(黄) 木村治美「黄昏のロンドンから」(昭和五十一年十一月、文春文庫 昭和六十年三月)

〔再〕三浦朱門「再会」（昭和五十八年六月、集英社文庫 昭和六十年五月）
 〔その他〕

〔助〕国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』（秀英出版 昭和二十六年五月）

追記

「複合辞」という用語は永野賢氏の論文「表現文法の問題——複合辞の認定について——」（『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』昭和二十八年、三省堂）に発するもので、そこでは時枝文法に基づいて、複合助詞・複合助動詞・複合接統詞・複合感動詞の四種を「複合辞」と認めている。現在では、特に助詞・助動詞相当連語を「複合辞」と呼ぶのが一般化しており、本書もその立場で永野氏の用語を使わせていたことをお断りしておく。

目次

まえがき

凡例

助詞と同様の働きをする表現

A 格助詞の働きをするもの

1	資格・立場・状態・視点を示す	3
	として／をもって／でもって／にとつて／からすると／からすれば／からして／からいうと／からいえば／からいって／からみると／からみれば／からみて／からみたら	
2	対象・関連を示す	7
	について／につき／に関して／に對し(て)／をめぐって／をめぐり／にかけて(は・も)／にかけると／にかけても／につけ(て)	
3	仕手・仲介・手段・根拠・原因を示す	14
	によって／により／によると／によれば／をもって／でもって／を通して／を通じて／にして／につき	
4	時・場所・状況を示す	22
	において／にあって／にあたつて／に際し(て)／(の)折に／(の)折から／につけ(て)／にして	
5	起点・終点・範囲を示す	31
	からして／をはじめ／に至るまで／にかけて／を通じて／にわたつて	
6	基準・境界を示す	36

7 割合を示す

をもって／でもって
 について／につき／に対して

8 対応を示す

によって(は)／により／によつたら／によると／によらず

9 同格を示す

との／という／といった／ところの

B 係助詞の働きをするもの

1 定義を示す

とは／というのは

2 主題化を示す

とは／というのは／といえば／という／といったら／とくると／ときたら／となると／となれば／になると／となつては／に至ると／に至つては／かといえば／かという／としては／にしてみれば／にしても／にしても／にしたつて／にしろ／にしては／といつても／といえども／には／におかれましては

C 副助詞の働きをするもの

1 強調を示す

という／といった／といって／として／にしても／にして／のあまり(に)／のかぎり／のこと(で)／ことに(は)／ことは／とばかり(に)／んばかり

2 限定・非限定を示す

に限って／に限り／ならでは／に限らず／によらず／を問わず

3 添加を示す

.....

4 除外を示す

ばかりか／に限らず／のみならず／どころか
をよそに

74

5 不適合を示す

に(も)なく／ならに

75

6 不明確を示す

と(も)なく／とやら

76

D 接続助詞の働きをするもの

79

一 時間的關係

79

1 同時性を示す

や否や／が早いか／そばから／とたん(に)／(か)と思うと／(か)と思えば
／(か)と思ったら／(か)と思う間もなく／(か)とみると／(か)とみれば

79

2 継起を示す

うえ(で)／すえ(に)／あげく(に)／ところ(が)／まま(で)／なり(で)

83

3 相関を示す

に従い／に従って／につれ(て)

88

二 順接条件

89

1 仮定を示す

かぎり(は)／ことには／ては／とすると／とすれば／としたら／(よ)
うものなら／(よ)うことなら／ものなら

89

2 確定を示す

ては／とすると／とすれば／としたら／てみると／てみれば／てみたら

95

3 因果関係を示す

からには／からは／以上(は)／うえは／かぎり(は)／だけに／だけあって
 ／ばかりに／もので／ものだから／ものを／ために(に)／おかげで／せい
 か
 ／に従い／に従って／につれ(て)

99

三 逆接条件

1 仮定を示す

までも／ところが／ところで／としても／にしても／にしたって／にしろ
 ／にせよ／(よ)うが／(よ)うと

112

2 確定を示す

からといって／とはいえ／と(は)いって(も)／とはいうものの／とはい
 ながら／とはい条／ところで／ところを／としても／にしても／にした
 って／にしろ／にせよ／に(も)かわらず／くせに／くせして／ものの／
 ものを／にしては／わりに／わりあい

116

3 対比を示す

のに対し(て)／どころか／かわり(に)／かと思うと／かと思えば／かと思
 えば／と同時に

125

四 平接関係―反復・並立・添加

ては／まま(で)／なり(で)／うえ(に)／ばかりか／どころか

130

E 並立助詞の働きをするもの

1 例示の対象を示す

／といい／／といわす／／といわす／／にしろ／／
 にせよ／／にせよ／／にしても／／にしても／／につけ／／につけ

134

2 仮定の対比を示す

／(よ)うが／／(よ)うが／／(よ)うと／／(よ)うと／／(よ)うが／まいが

139

F 終助詞の働きをするもの

／（よ）うと／まいと

- 1 感動・詠嘆・驚異を示す 141
 とは／といったら／かな／がな／ことか／ことだ／ものだ／ではないか／
 だい
- 2 疑問・問いかけ・確認を示す 147
 かい／かな／たっけ／だっけ／だい／ではないか／（よ）うが／だって
- 3 反語・反駁・否定・非難・後悔を示す 154
 かい／だい／ものか／ものではない／ものを／をや／ばこそ／（の）くせに
 ／（の）くせして／（よ）うに／（よ）うが／まいに／がな／ときたら／（よ）
 か
- 4 願望・勧誘を示す 167
 がな／ないかな／ないか（い）／（よ）うか
- 5 伝聞を示す 169
 とのこと／ということ／だって／とやら
- 6 回想を示す 172
 たっけ／だっけ
- 7 適当を示す 172
 ものか
- 8 理由・根拠を示す 173
 ものを／ことだ（し）
- 9 断定・強調を示す 175
 というものだ

助動詞と同様の働きをする表現

一 禁止を示す

てはいけない／てはならない／ことはいけない／ことはならない／てはだ
め(だ)／たらだめ(だ)／べからず／ものではない

179

二 義務・当然・当為・必然・必要・勧告・主張、およびその否定を示す

1 義務・当然・当為・必然・必要・勧告・主張

なければならぬ／なくてはならない／ねばならぬ／なければいけない／
なくてはいけない／なければだめ(だ)／なくてはだめ(だ)／べきだ／ざる
を得ない／よりほか(は)ない／ものだ／わけだ／のだ／はずだ／ことだ／
ことになる／にきまっている

183

2 否定形による当為等・当為等の否定・不必要

もので(は)ない／わけではない／わけにはいかない／わけがない／はずが
ない／ことはない／て(は)ならない／てはいけない／べきで(は)ない／べ
くもない／ところではない／とは限らない／には及ばない／までもない

207

三 可能・不可能を示す

ことができる／ことができない／こともならない／て(は)いられない／わ
けに(は)いかない

225

四 許容・許可を示す

て(も)いい／たっていい／て(も)かまわない／たってかまわない／て(も)
さしつかえない／て(も)けっこうだ／ともよい

228

五 意志・超意志を示す

1 意志・決定

(よ)うとする／んとする／まいとする／ことにする／ようにする／つもり

233

233